教育長だより　No. 16

２０２３年９月１２日

私が大切にしたいこと

～ 「県中学生広場」教育長賞 ～

野洲北中学校１年 東さおりさんの作文を紹介します。８月 19 日の県大会（滋賀県第 26 回中学生広場「私の思い 2023」）で、出場・発表した各市町代表１２名の中学生の中から「県教育長賞」（優秀賞：第２位に相当）を受賞されました。

私の幼稚園の卒園式の日の夜、母が入院しました。慢性骨髄性白血病という病気でした。白血病とは、血液のがんで、がん化した悪い白血球系細胞が無限に増殖する病気です。私はその病気の恐ろしさをまだ知らなかったのですが、ただ、母が入院するということが怖くて、私は玄関に座り込んで、泣きじゃくっていたことを今でもよく覚えています。

白血病を治すためには健康な人に骨髄液を提供してもらい、悪くなった骨髄液を入れ替える「骨髄移植」をしなければなりません。しかし、その治療はとても痛くてつらいものです。しかも、骨髄移植をするためには、白血球抗原の型が一致する必要があり、適合する確率は、一番合うと言われているきょうだいでも四分の一程度しかありません。幸い、母の兄と適合し、骨髄移植は無事成功しました。

ところが、骨髄移植後に出た多くの後遺症が母を苦しめました。脳の萎縮や極度の冷えと痺れ、白内障、さらに、それまでの生活が一変してしまったのは、脚の筋力が著しく低下してしまったことでした。脚が思うように動かず、自力ではうまく歩けないので、普段は杖を使うようになりました。階段を上り下りするときは手すりに掴（つか）まり、買い物をするときはカートを頼りにゆっくり歩きます。家族が近くにいる場合は、私たちが手を引いて歩くようにしています。誰かが困っているのなら、誰かが手を差しのべる。そんなことは当たり前だと私は思っていました。しかし、五年生になったある日、母と手をつないで歩くということに恥ずかしさを覚えました。私は忘れていました。一人で歩けなくて一番つらい思いをしていたのは、私でも父でも姉でもなく、母だということを。

そんな思いの中で過ごしていたある日、母と一緒にスーパーへ買い物に行きました。私たちがエレベーターに乗っていると四十代位の女性が脚の悪そうな高齢者の方の手を引いて乗ってきました。そのときは、脚が悪いのかな、くらいにしか思いませんでしたが、その二人が降りた後、ふと自分も同じ立場なのだと気づきました。そして、急に他人の目を気にして恥ずかしいと思っていた自分が恥ずかしくなりました。あの女性は素晴らしい行動をとっていると、私は素直に感じました。それならば、私の行動も自分自身で素晴らしいと認めてもよいのではないかと思いました。気づいたら涙が一筋流れていました。自分の情けなさに気づいたからなのか、恥ずかしいなんて思っていなかった頃の自分を思い出したからなのか、何の涙だったのかは今でもよくわかりません。

（裏面へ）

私が今、母の手をとって歩くことが恥ずかしくないかと言えば、正直そうではないと思います。でも、私の行動が誰かのためになるのなら、誰かのために私のできることをすればよいと思えるようになりました。

私はこれから、様々な人と出会い、楽しいことや嬉しいこと、また、つらいことや苦しいこと、恥ずかしいことなど、多くの経験をすると思います。そして、自分自身が見聞きし、学んだことをこれからの人生に生かし、みんなと支え合う輪の中に自分がいて、そんな社会をみんなでつくっていけたらいいなと思います。母にはもちろん、エレベーターで出会ったあの二人にも届いてほしいと思います。未熟な私を成長させてくれてありがとう。